主な記事
2面　高松教区宣教大会
3面　典礼奉仕、ひと
　　宇和島教会９０周年
　　コンフォルティ司教列聖
4面　震災支援、医療のともしび
　　教区スケジュール

カトリック高松教区報

２０１２年1月1日（第１４６号）
発行所　カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区:catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報:tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成:yousei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

VENI SANCTE SPIRITUS UNITATEM

信じたがゆえに幸い「信仰の年」

高松教区司教
使徒ヨハネ　諏訪榮治郎

新しい年を迎え、皆さまそれぞれに新しい抱負や希望を祈られたことでしょう。教区も皆さまの祈りを受け新しく歩む光をいただいております。

今年は第二バチカン公会議開幕五十周年に当たります。ベネディクト十六世教皇は今年を「信仰の年」と発表いたしました。この「信仰年」は、公会議開幕五十周年の二〇一二年十月十一日に始まり、二〇一三年十一月二十四日の王であるキリストの祭日に終わります。日本の教会はこの公会議を受けて始められた「ナイス」運動において、「信仰　共同体　現実」という三つの要素を生きる教会作りへと歩んでまいりました。教区宣教大会を経て新たに歩み始めようとする私たちにとって「追い風」となる年でしょう。

昨年は、司教叙階式、教区宣教大会、神学生誕生など多くの恵みを頂きました。特に司教着座後、全ての小教区を訪れることが出来ました。小教区では紙面上の信徒数ではなく一人一人の自己紹介を頂きそれぞれの思いを分かち合ってくださり、すばらしい出会いを各地で頂きました。教会共同体の美しさと信仰の力に触れることができましたことは私にとって大きな支えとなりました。改めて教会共同体を導いておられる司祭のみなさまに、主だけが御存知の隠れたその奉仕に感謝いたします。また多くの人々を祈りと奉献生活で支えておられる修道者の皆さまに感謝申しあげます。日々信仰において愛と犠牲を捧げ分かち合っておられる信徒の皆さまに心より感謝と尊敬を申し上げます。また東日本の被災地に対するオール日本教区の支援と絆作りに応える各教会（地区）の様々な協力活動を目の当たりにしました。教会の絆とその広がりと熱意の年であったとおもいます。

その中で私たちは「どんな教会になりたいのか」三年を掛けた祈りと模索の中で「教区宣教大会」を持つことが出来ました。教区民一人一人の愛と協力の結晶であったと感謝せずにはいられません。教会として目標を持つことの大切さ、地区（ブロック）として協力する教会の姿が次第に自然なこととして感じられました。その「目標」を具体的に現し生きる協力態勢をこれからも作り上げていく事になるでしょう。

皆さまの「目標」を受け、「教区設立五十周年」（二〇一三年）に向け、高松教区としての宣教司牧方針を近い将来明確にしたいと考えております。小教区にこだわらず協力宣教を生きる教区の姿勢を打ち出したいと考えています。各委員会諸活動、中でも青少年宣教司牧の地区・ブロックでの活性化が大きな課題となっています。このたび、旧神学院を活用して「霊性の家」を立ち上げようとしております。そこにおいて宣教の原動力である祈りと黙想、教会学校の活動の場など、生涯養成の充実を大切にしたいと思います。地区評議会などの規約の見直しなど「意識　組織　養成」の課題が山積いたしますが、神の民として歩めるように備えたいとおもいます。

さて、非常に残念な事ですが高松教区五十年の歩みの中での約三十年間、私たちは「分裂と対立その緊張」の歴史を味わいました。しかし私たちはいま、教区の「再生と一致」の目標をかかげ、全てのエネルギーをこの目標に注ぐ覚悟でおります。「信仰の年」として与えられたこの一年、聖霊の導きを探し求め、愛と一致の共同体として生きることを祈り続ける教区でありたいと願っております。具体的には年頭司教教書の中で述べるつもりです。『キリストの愛が私たちを駆り立てている』主に招かれた言葉から喜びの水をくみ、生きる力と希望を分かち合う私たちがいたるところで「神の国の奉仕者」となりますように。『良き業を始められた方が完成へと導いて下さいますように』と祈りながら。

高松教区宣教大会

四百人が祈り、語り、歌った

高松教区の宣教大会が十一月二十三日（勤労感謝の日）高松・桜町教会で開催された。四国四県から司祭、修道者、信徒ら約四百人が参加。教区の再生と一致をめざして祈り、語り、歌った。諏訪榮治郎司教は着任後初めての教区全体の行事となった。また同日が司教の司祭叙階三十五周年にあたり、教区民からは熱い期待と祝福の拍手を浴びていた。

大会は第一部『交わりの部』から始まった。聖堂で向かい合った信徒らは『わたしが、神様から頂いたお恵みは』『わたしが、カトリック教会の信者として今までできたことは』『わたしが、福音を実行するためにできることは』について熱心な分かち合いを行った。

昼食の後、アトラクションに続いて諏訪司教司式の感謝の祭儀（ミサ）が行われた。福音朗読に続いて宣教師、修道女、神学生、信徒から「自己の召命」が語られた。この後、諏訪司教がメッセージで、「きょうがスタートになる。あと二年で教区として五〇年を迎える。教区内にはいろんな修道会があるが、協力しながら教区づくりをしてほしい。『人生の主人公は神様』。希望は必ずあの方が実現してくださる。希望を持って歩んで行きましょう」と述べた。

共同祈願は青年代表や各地区代表が祈りを捧げた。奉納行列では四県の産物と四県の一致を表す四国の地図などが奉納された。聖体拝領の後、各地区と青年代表から『こんな教会になりたい』と表明する祈りが捧げられた。その後、諏訪司教に司祭叙階三十五周年のお祝いの花束が贈られ会場から大きな祝福の拍手がわいた。

拝領祈願の後、派遣の行列がありミサを終えた。

諏訪司教と共に歩もう

私をお使いください

今まさに新しい息吹を感じ、諏訪司教様と共に新しい教区がスタートしたという思いです。

香川地区は、この一年の間に、叙階式、宣教大会と、まさに「産みの苦労」をともに体験させていただきました。さまざまな困難や課題がありましたが、みんなで話し合い、協力し、ともに歩むことができたのは、まさに神の民の証であったと実感しています。

そして宣教大会では、全小教区の信徒の思いを一つにまとめ、祈りとして主に捧げることができました。これから香川地区の全教会でこの祈りを共に捧げ、歩んでいきます。

香川地区の祈り

香川地区の私たちは、今改めて私たちの信仰を確認し、神様からいただいた恵みに感謝し、その賜物を生かし、一人ひとりに与えられた役割を意識しながら、このすばらしい信仰を次世代の人々や周りの人達に伝えていきます。一人ひとりは小さな力ですが、この大会の準備を通して新たに生まれた地区の絆をさらに育て一致して教会の使命を果たします。主よ、どうか私たちが神の民として、彼らに関心を持ち、理解し、時間をかけて見守りながら、教会全体で、私たちの兄弟姉妹を大切に育てていくことが出来ますように、私たちのこの手を、この足を、この声を、この心を、お使い下さい。

香川地区評議会議長　日向育子

喜びを創り分かち合う教会

高知地区は二〇〇七年から再生の道が始まりました。合同役員会に提議出来る小教区宣教司牧評議会規約も整い、養成コースも、毎月第三日曜日に「私の教会」から「キリストの教会」へのテーマのもと合同で行い、ミサも九時三十分からに統一しました。共に祈り学び、交流することが普通になりました。

二〇〇八年一月には〃「開かれた教会」一人ひとりが心を開き、その出会いを大切にし、喜びを創り、分かち合う教会。社会とともに歩み、奉仕する教会。〃という目標を定め、小さな中村、安芸教会を合同で訪問もしました。教区の日には赤岡教会に参集し、小さな教会の今後の在り方、協力宣教司牧、地区負担金の免除なども議題に上りました。

二〇〇九年三月に「教区の再生と一致へ向けて」の司教教書が発布されてからは養成コースを「目標の具体化」とし、信仰・共同体・社会の側面から分かち合いました。

二〇一〇年一月の教区代表者会議では特に軌道修正することなく養成を続け、「信仰・祈り・ミサを土台とした共同体に成長できる教会」「誰をも受け入れる教会」「地域に開かれる教会」「教会の素晴らしさを周りに伝えられるような教会」を決意しました。

高知地区評議会議長　宮本匡士

宣教大会から新たな出発を

三年がかりの歩みの中で、わたしたちは「教会」が成り立つ三本柱となる『信仰・共同体・社会』はトライアングルで、どれが欠けても存在しえないことを分かち合い、「私たちの目指す教会の将来像」を見定めました。この中で「共同体の組織」を支える『教区・地区・小教区』の関係もトライアングルであり、更に今後の様々な課題についての道のりも『現状認識・将来像・具体化』が実現への三要素であることがはっきり解ってきました。

そうして今、宣教大会を終え、わたしたちは新たな第一歩を歩み始めました。

教区と小教区の間にあって、「地区の役割をどのように果たすか」や、極端に信徒数の異なる「小教区間の助け合いの方法は」等々、様々な課題について考えると、それらは三位一体の関係で成り立っていることをわきまえて共に考え、一歩ずつ歩まなければと思われます。「真実か。公平か。好意と友情を深めるか。皆のためになるか。」との社訓が目にとまりました。この中に「皆の幸せ」とか「愛」を加えれば私たちの伝えようとすることに近く、その姿勢に温かいものを感じ、私たちの現代社会への宣教へと思いをはせたのでした。私たちは「新しい福音宣教」を諏訪司教様を中心に三位一体の神につつまれて、教区民を挙げ、希望と助け合いを以って、新しい一歩を力強く歩むことが出来ますように皆で祈りを新たにして居ります。

愛媛地区評議会議長　新居田大作

「教会」を共に考え育てる

宣教大会を終え、香川地区の皆様には大変お世話になり感謝を申し上げます。

徳島地区は、場所的には教区に近いと思いますが、今までなぜか教区から遠い存在であったように思います。高松教区にその時々に何が起こっているのか、真の情報に乏しかったと思うのです。

それが、教区民の集い、宣教大会を迎えるにあたり、段々と司教様の意向、教区の方向性を知る事ができました。しかし「教会とは？」の問いに信者が答える時、各人の色々な経験、思いから戸惑いを感じているのではないでしょうか。過去・現在・未来の全てがその問いには含まれているからです。

そこで地区の一つの役割は、小教区を越えて疑問、問題点等を声に出して頂き、真摯に分かち合いながら「教会」を共に考え育てていくことだと思います。信者が本音を言える場も必要でしょう。昨年そんな私達信者の声を、溝部司教様は地区で開催された〃教区民の集い〃で優しく受け止めて褒めて下さり、私達に光を与えてくださいました。そして、徳島地区は、少しずつともに歩き始めました。

近い将来「教会とは？」の問いに子供、青年、大人が喜びをもって自分の答えを出せるように、地区としての使命を果たしていく所存でございます。

徳島地区評議会議長　桑原稔実

はばたき

主の御降誕の喜びと、新年に主の御加護をお祈り申し上げます。

今日一日実行すべき十訓

一、今日一日は未来永劫再び逢いがたき一日なりと心得て時間を徒らに費やさざる事
二、一樹の陰と雖（いえど）も未来永劫の住所なりと心得て不実の思いをなさざる事
三、一粒一片の微物と雖も皆是れ天主様の光明なりと心得て粗略に致さざる事
四、一家の親しき中と雖も各自の要務と用品とを厳重に差別し決して乱用濫費せざる事
五、手足は用うれども尽きぬものなれば珠を磨くの思いにて如何なる労働も楽しみて勤むる事
六、夫婦主従の親しき仲と雖も馴れて我儘の起こらば初対面の時の心に立ちかえり見る事
七、他人より嘲罵叱責を受くるは他日の光明なりと心得深く我が身を省みて己は人を誹謗（そしら）ぬ事
八、総て感激の余り怒り哀しみ且つ喜ぶ心の起こりたる時は正身端座実相を観じて言語を発せざる事
九、人に逢う時は好き嫌いを問わず総て愛嬌を以ってし仮り初めの契約も自己の分限と実行時間の有無を考えて取り結ぶ事
十、唯独り住み唯独り行くと雖も天主様の照鑑ある事を信じて善悪因果の免れざる事を恐れ慎むべき事

高松教区宣教大会（教区シノドス）

2011年11月23日（水）

「私が神さまから頂いた恵み」　(信仰)
「私が教会のために出来たこと」　(共同体)
「私がこれから出来ること」　(社会)

＜分かち合い＞

指導のパウロ神父は、教会は「教える会」ではありません。キリストの恵みの中に生きる共同体です。自分が神様からいただいた恵みをみんなに捧げる。わたしの恵みはみんなの恵み。協力しながら共同体をつくる。神様は一人ひとりに合った恵みを与えられる。それを文字で表明してくださいと呼びかけた。

「わたしをお使い下さい」

◇◇この感動を五十周年へ◇◇

今大会は諏訪司教様着座後初の教区の日でした。大会全般で印象に深く残ったのは、まず、交わりの部の途中の上映とアトラクションでの寸劇の二部構成だった「大工道具」で、飽きさせない趣向を盛り込んで、笑いを誘いつつ、参加者に一考を促す演出に感心しました。

交わりの部では質問への答えの中で、病苦との対峙の中、カトリック信仰を通して回復に向かっていったという分かち合いなど、貴重なお話を伺いました。

WYD報告のスライドで紹介されていた報告者お二方の達成感に満ちあふれた表情やドミニコ宣教修道女会の合唱、また高知地区信徒の皆様のテゼが聖堂の中で美しく響き、それぞれに心から感銘を受けました。

これからは二年後の教区創立五十周年に向けて、この感動を忘れず活かして、信仰の道を歩んでいきたいと思います。

三本松教会　長町公司

＜子供も参加＞

教区の一致と再生を見据えた今回の大会では様々異論もあった中で子どもも大人もおなじ教会の一員として同じテーブルに着くように配慮がなされた。大人のグループメンバーも子どもの話に大きくうなずきながら熱心に耳を傾けていた。その中で子どもの瞳がキラキラと輝いていたのが印象的だった。

◇◇神様の気配感じた◇◇

三年間の準備と勉強を重ねて、教区民が一同に集い、熱く燃えた一日だった気がします。当日までの準備、対応、接待等の関係された皆様に感謝！

第一部〈交わりの部〉では予め準備された三つの質問に、自分の態度を互いに表明する場であった。教会共同体や個人の色が出て、大変意義あるものだった。司会進行役もいない中であったが、もう少し時間的ゆとりが望まれた。

第二部では、きれいな歌声や、笑いありの寸劇等、楽しい時間が過ぎ、皆さんの練習の成果はみごとでした。

最後〈感謝の祭儀〉での、各代表の共同祈願では、具体的な力強いメッセージが込められて、参加した全員が決意を新たにしたのではないでしょうか。約四百名の参加と、時間的制約がある中、無事に宣教大会が終わり、今私は、神様の目に見えない力と、気配を感じる不思議な感覚をもっています。

さあ、これから行動に移す時、そして、どのように結果につなげるか一人ひとりに求められています。

道後教会　坂本喜久夫

＜若者が発表＆寸劇「大工道具」も好評＞

お昼からのアトラクションではスペインで開かれたＷＹＤに参加した中島町教会の松下恵子さん、道後教会の寺尾由香里さんが『苦しいこともあったけど神様の導きを感じた』『教皇ミサに感動、参加できたことは大きな恵み』など体験を述べた。また寸劇『大工道具』では教区の一致を促す『わたしを神様の道具としてお使いください』のメッセージを込めたユーモラスな動きやセリフに会場は大爆笑。またドミニコ宣教修道女会の合唱、そして高知地区信徒によるテゼの合唱を楽しんだ。

＜特産品を奉納＞

午後１時から宣教大会派遣ミサが執り行われ、奉納の儀では長い奉納行列が続き、四国四県の特産物（愛媛・ミカン、徳島・サツマイモ、香川・オリーブ、高知・ブンタン）、四県の一致を表す為の各県の地図そして東日本大震災被災地復興支援を念頭に差し出された堂内献金などが厳かな中に奉納された。

＜召命を語る＞

ミサの中、自らの召命についての発表の部では司祭からスペイン宣教会ホセ・マリア・ビデガイン師、修道者はドミニコ宣教修道女会Sr. 山内留美子さん、神学生は高山徹氏、信徒はマリッジエンカウンターから野崎悟史・理恵夫妻にそれぞれその召命の素晴らしさと、それを生きる決意を語って頂いた。

＜地区の祈り＞

聖体拝領の後、各地区と青年代表から、現状認識から取りかかり３年をかけて分かち合い、自己養成を通して導き出した『私たちはこんな教会になりたい』と表明する祈りが捧げられた。

◇◇主の名の下に集う◇◇

四百人の信徒が集い開催された宣教大会・この大会のために準備した三年間。特に諏訪司教様がいらした高知地区では二〇〇六年からの十回に及ぶ養成コースの上に積み上げられた三年間でした。「どんな教会共同体を目指すのか？」このテーマを投げかけられた五年前、慣れないグループでの分かち合いは戸惑うことも多く、最初に口をついて出てくる言葉は不平、不満、出来ていないところ、良くないところばかりでした。でも分かち合いを重ねるごとに「それならどうすればいい？」という気持ちが広がっていきました。

宣教大会当日、交わりの部で熱心に分かち合う姿は、各小教区でも同じように歩んできたことを物語っていました。

主の名の下に集うところにイエス様はいてくださいます。ひとつになろう！その心を合わせたミサを思い起こし、また新しい時を兄弟姉妹たちと積み上げていきたいと思います。大会運営に関わってくださった皆様、細やかな心配りに心より感謝申し上げます。

中島町教会　青野芳子

＜宣教への派遣＞

拝領祈願の後、派遣の儀では十字架を先頭に福音書・分かち合い表明用紙・カリスとパテナ・塩・ローソクを携えてこれからの福音宣教へと派遣し、宣教大会派遣ミサを終えた。

◇◇キリストの体にたどりつく◇◇

随所に趣向が凝らされた、楽しい宣教大会だった。香川の皆さん、本当にご苦労様でした。司教様から、又も思わぬ球が返って来て、宣教大会に向かって「ともよろ」の信仰、共同体、社会という三本柱について、小教区、地区はそれをどのように具体化していくかという話し合いをしてきた。

シノドスは、それを教区全体で分かち合う場になると思っていた。ところが直前になって、話は個人的な問いになった。

①わたしが神様から頂いたお恵みは？②わたしがカトリック信者として今までできたことは？③わたしが福音を実行するためにできることは？根源的な問いかけだと思って答えを書いた。ところがパウロ神父からこの質問の説明を受けて、その意図がやっと分かった。

それぞれの大工道具はそれぞれの役割があり、力を合わせることによって家が建つという香川地区の寸劇がそれだった。個々のカリスマの自覚。様々な角度から硬直した脳を揉みほぐされ続け、コリント第一の十二章「キリストの体」にたどりついた。

阿南教会　渡部康雄

『典礼奉仕』のために ⑭

高松教区典礼委員長　レナト・フィリッピニ師

典礼を半減する貧弱な「しるし」

来日の日から、いろいろな行事やイベントに参加して、日本特有の文化に触れてきました。式典や儀式が重要視されるのは、日本という国の特徴のひとつと感じ、感動を覚えたことが何度もあります。実際、誕生からお葬式まで、また入園式や退職式と、様々な式典が催されます。人生の節目に行われる社会的な行事や儀式では、その目的に合った服装、道具、動作、言葉などが丁寧に選ばれ、人から人へと受け継がれています。外国人宣教師の私は、感動するばかりでなく、そこから多くのことを学びました。

カトリック教会の儀式を考えますと、どうも、そのような丁寧さと荘厳さに欠けるところが目につき、がっかりすることもあります。復活徹夜祭の典礼には火と光の式があり、また聖水と洗礼、香油など意義深く、きれいなシンボルで満ちています。でも、用いられる祭具が貧弱なため、しまりのない寂しい典礼になることもあるのではないでしょうか。

結婚披露宴でよくあるキャンドルサービスは、美しい道具で点火されます。復活徹夜祭の光の祭儀でライターが使われては寂しい限りです。

大蝋燭は復活したキリストのシンボルとして高く掲げられ「輝かしい勝利、新しいのち」のしるしとして賛美されるのです。しかし、それが何年も使われてく荘厳な「しるし」とは、とても言えないでしょう。

洗礼式で、受洗者の額に水を注ぐのに、ミサ用の小さな器を使ったり、また、聖水がこぼれないように、料理用のボールを使用する教会もあるようです。

通常の典礼で使われる祭具についても、いくつか気づきます。底の剥げた杯、汚れの目立つパテナなどがありませんか。キリストの聖なる体と聖なる血を受け止める聖器なのに。また、香炉、香船やその他の祭具の変色やさびも気になります。典礼の美しさと荘厳さを象徴する祭服の変色や型崩れ、そして汗の染みなども目につきます。

このようなことに、皆さんは気づいたことがありませんか。私は、日本の伝統行事を見て、このようなことは『荘厳な典礼の美しいメッセージ』を半減するものではないかと学んだのです。しまりのない典礼を行うのは、神をはじめ、司祭と信徒が、互いを軽んずることにもなるのではないでしょうか。典礼の中で、「しるし」は重要な役目を果たします。特に荘厳な典礼では、「見えるシンボル・美しいしるし」は欠かせないものです。

神に栄光を帰するため、また、心からの感謝を表すため、美しく、優美で、品格ある、魅力的な典礼を行いたいものです。

カトリック広報担当者全国会議

被災地で生の声聞く

１１月１５日（火）～１７日（木）

十九年振りの地方開催となった今回は広報畑のエキスパートであり、東日本大震災を直接体験されたSr長谷川昌子（女子パウロ会）さんを講師に迎え、「震災を経て　カトリック広報の在り方を考える」と題し、震災の地である仙台元寺小路教会を会場に開催された。

今年は震災で情報伝達手段を断たれた中、「口コミ」の有効性に加え、客観性を以って伝える全国紙と復興へと励ます具体性をもった地方紙の温度差や、報道にかかわる者として「誠実」「協働」「謙虚」の姿勢の大切さなどのほか、広報者の知識や資質などについての詳細な解説をしていただいた。

三日間に亘る会議の二日目には未だ津波の惨状を留めた志津川、石巻を自分の目で確かめる中、志津川では奥さんを亡くされながらも地元社会福祉協議会のボランティアセンター長として奔走しておられる方の切実な叫びともいえる現状をお聞きしたり、カリタスジャパンのボランティアが活躍している漁網の製作現場の視察などを通し、通常では全く接することが出来ない生の声を聞くことにより、震災はまだまだ続いていることを実感させられた。

今回の会議で確認されたことの一つは、被災者の痛みと思いを風化させることなく、これからもたゆまず、被災地の現実を発信し続けなければならないことを広報にかかわる立場として共有したことである。

グループ討議風景

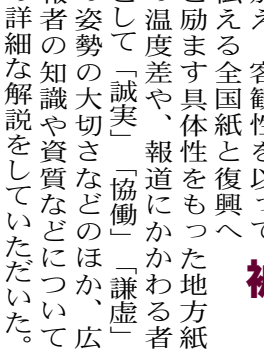
詳細はカトリック新聞（２０１１・11・27）掲載

文責　谷口広海

ひと　典礼委員として司祭を補佐

江ノ口教会

山崎史朗さん（82歳）



山崎史朗さんは、事業経営に携るかたわら、一年余り奥さんを自宅介護なさり深夜に及ぶ看取りの間の暇に、パソコンを覚えられたとおっしゃる。奥さんは晩年には、介護施設にお世話になったが、史朗さんの看取りのうちに一昨年帰天されている。

史朗さんの幼年期時代を伺ってみると、戦前は荘厳な大聖堂、司祭館、伝道場等のあった中島町教会が、打って付けの遊び場となっていた。そこでの遊び友達の一人が、阿久根教会の山口重義神父さんである。また、ミサこたえ（侍者）をしていたことや、田中神父（司教）さんからかわいがってもらったことなど、懐かしい思い出を話していただいた。

五人兄弟の長兄正保さんは、田中神父さんに従って中島町教会から江ノ口教会設立（聖堂建立）に尽力され、生涯を江ノ口教会の典礼役員として司祭を補佐なさった方である。家系を遡ると、明治２年１２月「浦上四番崩れ」の流人に昼食を接待した山本虎吾氏から芽生えた「横畠キリシタン」の祖父正汎（虎吾氏の外孫）さん、後を継いだ父正巳さんも布教委員を務め、横畠教会から中島町教会の柱石になった方である。

今秋の１０月、長崎から巡礼団が来られると知り、「横畠キリシタン」に繋がる史朗さんと正宏（史朗さんの甥）さんにお知らせしたが、巡礼団とはすれ違いに終わり残念がっておられた。史朗さんは、かつての横畠聖堂の歴史を知る数少ない方の一人である。何時までも、お元気でいてほしいと願わずにはいられない。

江ノ口教会　山下精三

ちょっとひといき

神様の愛

神様の愛
神様の愛は
何処にあるかを知っていますか

あなたの　あなたの
あなたの胸の中にあるのです
他の感情で
今は隠されていますが
今年こそ　その愛を
有効に使用しないのは損です

神様の愛は使っても使っても
使いきれないのですから

喜びのうちに創立９０周年

宇和島教会　諏訪司教を迎えて祝う

洗礼・初聖体・堅信式

去る十一月二十日（日）カトリック宇和島教会にて創立九十周年記念ミサが使徒ヨハネ諏訪榮治郎司教様の司式で執り行われました。

キリスト教と宇和島との出会いは聖フランシスコ・ザビエルの時代にまで遡りますが、キリシタン禁教令が発布され明治六年に廃止されるまでの長い迫害時代を経て、再び宣教活動が開始されてから本格的な宇和島教会の歴史が始まりました。

教会の正式な創立はドミニコ会創始者聖ドミニコの死去七百年祭が記念された一九二一年にその行事の一環として計画された教会堂と司祭館の完成に伴って執り行われた献堂式をもって成立したとされています。

九十周年記念ミサの中では子どもの洗礼式（二名）、堅信式（六名）、初聖体（四名）、そして七五三の祝い（二十名）も同時に行っていただきました。諏訪司教様はこれから秘跡を受けようとしている子どもたちにわかりやすく秘跡の意味を説きながらミサが進行していきました。

そのお話の中で、私たちは神から出て、また神に帰っていくということや、愛そのものである神によって創られた私たちの存在には神の愛が凝縮されていて、その愛を生きるように呼ばれているとおっしゃられ、参加していた信者も信仰を生きる決意を共にいたしました。神の愛の見えるしるしである秘跡授与の喜びの中で、九十周年ミサが執り行われたことはこの上ない神からの祝福であったと思います。

ミサの後、愛和聖母幼稚園ホールにて記念パーティーが行われ、参加していただいた方々に宇和島の郷土料理ふくめんや鯛そうめんを食べていただき九十周年を共に祝っていただきました。

宇和島教会　橋本陽子

ザベリオ会創立者 コンフォルティ司教　聖人に

10月23日世界宣教の日にあたり、ローマで、教皇ベネディクト16世により、聖ザベリオ宣教会の創立者グイド・マリア・コンフォルティ（イタリア1865－1931）と他の二方の列聖式が行われた。18カ国で働いているザベリオ会会員の代表と、その地域の信徒の代表は、列聖式に参加してきました。日本からは104人の（うちは司教3名）巡礼団が参列しました。

列聖式は行われるたびに教会が新しい聖人を台の上に置いておく像ではなく、キリスト教の精神、その心を生かし、生きた模範としてわたしたちに与えています。聖コンフォルティは40年間司牧者として教区を導きながら、宣教に燃えて宣教会も創立しました。どうか聖コンフォルティの霊性に養われ、その福音宣教の熱意に促されて、キリストを伝え、証することができますように。みなさん私と共に神様に感謝し、喜んで下さい。

レナト神父
（ザベリオ会会員）

医療法人社団聖心会　阪本病院
看護師・准看護師
随時募集中です！
院内保育園開設

ご連絡を
お待ちしています。
連絡先（事務局）
0120-770-315

食べる青唐辛子　絶賛好評発売中!
自然の味わいをいつまでも
株式会社 サンコウフーズ
〒761-4421 香川県小豆郡小豆島町苗羽甲 2204
TEL 0879-82-0430　FAX 0879-82-1102
URL http://sankou-foods.com
E-mail shodoshima@sankou-foods.com

住環境福祉コーディネーターが家造り
福祉住環境リフォーム
高齢者・障害者に配慮したバリアフリーの住宅
福祉住環境リフォーム・新築・増改築工事・設計施工
有限会社リフォームオオタ
代表取締役　太田　修
〒763-0092　丸亀市川西町南449番地3　TEL (0877) 28-0881・FAX (0877) 28-0190
E-mail o-chandazo@theia.ocn.ne.jp　URL http://www.reform-oota.co.jp

医療のともしび（30）

フィリピン　ギバン村での メディカルミッション

この活動は日本カトリック医師会が毎年１回行っているもので、今年で２３回目になります。医療機関にかかることができない貧しい人々に、日本から医師、看護師、歯科医師、歯科技工士、薬剤師、事務、鍼灸師が行って医療を行う活動です。

８月上旬、北海道、東京、大阪、福岡など全国から総勢２８人の有志が集まり、４泊５日の日程で行いました。ギバン村は首都マニラから国内線で北へ約１時間３０分、そしてここからバスで約２時間南下したところにあります。この村は小さな農村で、ここに２３年前に日本から融資を受けて設立された診療所があり、そこで医療活動をしました。医療資材は日本からダンボール箱にいれ持っていきました。主な医療活動は、制限された環境ですので、限界がありますが、内科では通常の診療（レントゲンは撮れます）、外科は局所麻酔で行える手術、歯科は抜歯処置（削ることもあるようですが、現地の人は抜歯を望むことが多いようです）、処方（抗生剤、鎮痛剤、外用薬、ビタミン剤など）、鍼灸マッサージを行いました。医療活動をしたのは２日間でしたが１０００名近くが来てくれました。

フィリピンは貧富の差が激しい国です。国民の９割が貧しいそうです。平均的な月収は日本円換算で２万円で、医療保険に入ろうとすると月々２千円は必要なため、これら多くの人が医療保険を持てません。もちろん、ここに来る人々も医療保険を持っていません。

私は外科チームに所属し、日本では見ることのできない大きな粉瘤や脂肪腫など５５例を切除してきましたが、よくここまで大きくなったと驚く症例もありました。

また彼らは日本人が持っていないものを持っています。それは痛みに耐える姿、化膿に強い免疫力、数時間待っても文句の一つも表明せず辛抱強く順番を待つ姿がありました。そしてなによりも、多くの笑顔に美しさを感じました。

日本の物質的豊かさを改めて感じます。でも一方、精神的には、日本のほうが貧しいように感じました。日本に帰国した直後にＪＲ内でみた日本人の表情は平均的に暗く、疲れているように見えました。

フィリピンに医療支援に行ったわけですが、帰国後は、行った私が元気をもらって来ていました。このミッションに何回も行く人がいます。それは年１回、元気をいただくために行くということなのでしょう。まるで医療者のための黙想の場のようですね。

聖マルチン病院　整形外科　田賀谷健一

教区スケジュール

1月
- 1日（日）元旦　神の母聖マリア祝日（世界平和の日）
- 8日（日）主の公現
- 9日（月）主の洗礼　成人の日
- 14日（土）教区女性の集い in 高知
- 15日（日）年間第2主日
- 18日（水）司祭評議会in 塩の江（～19日）
  キリスト教一致週間（～25日）
- 20日（金）宣教司牧評議会役員会13:00
- 22日（日）年間第3主日「エキュメニカル意向のミサ」
- 29日（日）年間第4主日「児童福祉の日」

2月
- 2日（木）主の奉献
- 5日（日）年間第5主日「日本26聖人殉教者」
- 11日（土）建国記念の日「世界病者の日」
- 12日（日）年間第6主日
- 19日（日）年間第7主日
- 22日（水）灰の水曜日（大斎・小斎）「四旬節愛の献金」開始
- 26日（日）四旬節第1主日

インターネット【動画配信】

宣教大会（2011年11月23日）動画配信中！
桜町教会ホームページから繋がります。
ぜひご覧ください。

温かかったよ！さぬきうどん

三本松教会の六車さんら
大船渡の被災者らに振る舞う

「さぬきうどん振る舞い隊」

三本松教会の六車さんと有志三人が十一月七日から十日、大阪教会管区が被災者支援のためのベース（地の森憩いの家）を立ち上げている大船渡に入った。さっそくベースに隣接する仮設住宅で、大阪教会管区大船渡プロジェクトメンバーからの期待が高かったうどんを炊き出そうと、往復三千キロを走破。派遣規模としては、たった四人と小規模ではあったが、ベース事務局長さんや現地の外国籍信徒の司牧支援のため、同所に修道院を定めている聖心侍女会シスター、同じく淳心会司祭、また、わざわざ東京から駆けつけてくださったボランティア、そして大船渡教会信徒の方々の支援をうけ、被災者との「笑顔とありがとう」の心の交流の中でのうどん炊き出しとなった。

今回の炊き出しは、大船渡ベースと地元被災者との初期交流活動の側面のではないかと思われる。また善意あるボランティアであっても、周りからの理解と助けがなければうまく回らないものだということも体験した。翌日には四十キロほど北にある釜石ベースで、カリタスジャパンメンバーに全面協力して頂き、所期の目的を果たすことができた。

今回の活動に対し経済的、物的、精神的支援を以て参加して頂いた方々に心からの感謝を申し上げたい。

支援という意味では大きな力となったと思われる。また善意あるボランティアであっても、周りからの理解と助けがなければうまく回らないものだということも体験した。翌日には四十キロほど北にある釜石ベースで、カリタスジャパンメンバーに全面協力して頂き、所期の目的を果たすことができた。

今回の活動に対し経済的、物的、精神的支援を以て参加して頂いた方々に心からの感謝を申し上げたい。

「心も体もあったかくなりました」

十一月八日、前日が小雨模様のお天気で心配しましたが、当日は晴れてよい天気。近くの今出山の木々も色づき初め、五葉山からの北風がひんやり冷たく感じられるこの日、はるばる四国・高松から助祭の谷口さん、六車さんはじめ四人の「讃岐うどん振る舞い隊」の方々がやって来てくださいました。東京からも応援の女性がお二人。会場になったのは大船渡町地ノ森の七十二戸の仮設住宅。自治会長の清水さんは、集会所を食堂に仕立ててくださいました。「振る舞い隊」の方々は見事なチームワークで、釜などの調理器具で仮設の厨房を作り、一から手作りの讃岐うどんを準備してくださいました。誰かプロがいるのかと思いお聞きしてみると、みなさん素人とのこと。

「玄人はだし」とはこのことです。会場には食欲をそそる香りが広がりました。お隣同士声をかけあって、食堂となった集会所で召し上がる人、風邪気味なのでと受け取って自宅へ持ち帰る人、受け取りに出てこられない方のために運んでくださる人、本場の味に魅せられておかわりをする人、皆さん心と体が温まって、たくさんの笑顔と感謝の言葉がありました。地元の「アマタケ・南部どりの玉子」も使ってくださいました。

生地伸ばしとカットに挑戦

私もおかわりして二杯もご馳走になりました。思っていたよりやわらかく、出汁のきいたタレが風味豊かで、幸せな気分になりました。その場でうどん打ちの体験ができる即席の講習会もありました。

「讃岐うどんもうれしいけれど、その心がとてもうれしかった。」と清水自治会長さんがおっしゃっていました。復興に取り組んでいる私たちに、勇気と元気を届けてくださった「讃岐うどん振る舞い隊」のみなさん、ほんとうにありがとうございました。

カトリック大船渡教会
菅原圭一

高松サポートセンター（ＴＳＣ）だより

被災地へ「お米券」届けよう!!

日頃からＴＳＣへのご理解とご協力に感謝いたします。大阪教会管区の被災地での活動拠点である「地の森憩いの家」（大船渡プロジェクト：写真）が１月１４日に開所式の運びとなっています。今年からこの「地の森憩いの家」からのニーズ情報などを踏まえながら、ＴＳＣが目的としている地道な活動に取り組むことになります。個人や個々のグループ、団体等、単独での支援活動もこれまで同様、大いに奨励されるところです。震災被災者の方々は支援活動が先細りすることがないようにとの切実な願いを持っておられます。そしてこの度、私たちは地元からの要望にこたえて、お米券（お米と交換できる券）を届ける“お米券キャンペーン”を始めました。

高松教区内の活動については、把握分を高松教区ホームページに掲載しています。

尚、関連情報がありましたらどんな小さな事柄でもかまいませんからお寄せ下さい。

Tel 090-9577-4131
E-mail：tk-koho@mxi.netwave.or.jp

女性の会大会のお知らせ

プログラム

日　時：2012年1月14日（土）
場　所：高知市　カトリック江ノ口教会
テーマ：「聖書から～女性の使命～」
- マタイの福音の系図に登場する女性
- 女性・教会・社会

講　師：シスター石川治子
（カトリック中央協議会
社会司教委員会秘書・実務担当）

日　程　（スケジュール）
- 10:30　受　付
- 10:45　開会の祈り　挨拶
- 11:00　講　演
- 12:00　昼　食
- 12:45　分科会
- 13:30　まとめ
- 14:00　ミ　サ（司式：溝部司教）
- 15:00　閉　会

被災地に思いを寄せて

いわきへ“うどん隊”

去る２０１１年１１月２７日福島県いわき市にて、うどん炊き出しに参加しました。総勢９名で、２日前にマイクロバスで高松から出かけました。私は、一員として、大変貴重な時を頂きました。

当日の会場は、良いお天気で温かく、地元の方で賑わっていました。うどん炊き出し等のイベントとして周知頂いていたのです。氏家和仁神父様（元高松教区協力司祭）や関わる教会の方々とさいたまＳＣの方の周知活動にもサポートされて、順調に活動出来ました。近隣の仮設住宅の方が予想以上に多く来て下さいました。２時間の準備を経て、うどん提供が開始されました。眼前には長蛇の列があり、一生懸命に各自の持ち場で働いて提供しました。訪れた方々は本当に喜ばれ、中には涙を浮かべておられる方もいました。「来てもらえるだけで嬉しい」という言葉も頂きました。約５５０食を提供することが出来ました。

多くのお客でにぎわう会場

今回のうどん隊の皆様、いわきの皆様、ＳＣの皆様、また四国から後方支援下さった全ての皆様に感謝申し上げます。この大きな繋がりに感謝し、これからも祈りのうちに被災地に思いを寄せていきたいと思います。

高山　徹

編集後記

昨年の流行語大賞は「なでしこジャパン」でした。東日本大震災で国民が意気消沈している中での最高に明るい、元気が出るニュースだったからでしょう。

さて、今年はどこに希望を置き、どのように生きて行けばよいのでしょうか。宣教大会が終わり、各地区でもこれからまた、再生と一致へと希望にむけての一歩を踏み出します。今年の教区報も宜しく！

私たちは、自分を創造しようとすることもをまなび、護りましょう

暁　の　星　学　園

鳴門聖母幼稚園　高知聖母幼稚園
阿南聖母幼稚園　海の星幼稚園

聖ドミニコ宣教修道女会